



第10回

TBIV TBI VIETNAM CO.,LTD

T BALANCE WEIGHT INTERNATIONAL VIETNAM CO.,LTD

- 3rd floor of standard factory in unit No.1C in Standard Factory Building No.2, Located at Road 15, Tan Thuan EPZ, District 7, Ho Chi Minh City
- TEL:(84-8)3770-0644 FAX:(84-8)3770-0646
- 従業員数 85名(2010年10月現在)
- 業内容 自動車部品ホイールバランスウェイト製造

東豊工業株式会社は、1959年創業で、愛知県豊田市に本社を置いている。

主な事業内容は、自動車、自動二輪車向けのホイールバランスウェイト製造と巻ブシュの製造である。

T BALANCE WEIGHT INTERNATIONAL VIETNAM Co.,LTD (TBIV)社は、東豊工業の100%子会社として、ベトナムホーチミン市7区のタントアン輸出加工区内に、ホイールバランスウェイトの製造工場として、2008年1月に設立されました。

今回は、ベトナム工場の立上げ時から現在まで責任者として現地でご活躍されているTBIVの中根 彰浩ジェネラルマネージャーにお話を伺いました。



中根彰浩ジェネラルマネージャー

設立の経緯

TBIVは、2008年1月28日に、ベトナムホーチミン市に設立されました。TBIVは、東豊工業の初めての本格的な海外拠点であり、自動車向けのホイールバランスウェイトの製造を主な事業としている。数年前から海外への工場展開を考えていた東豊工業では、東南アジアでの工場設立を目指し、本社社長自らタイ、マレーシア、インドネシア、ベトナムなどの東南アジア諸国の現地調査を行っていた。東南アジア諸国を回った結果、最終的には、勤勉で素直な国民性や人件費、今後の経済成長の可能性など総合的な評価が相対的に最も高いと評価された国がベトナムであった。その後、更に現地の調査や視察を経て、最終

的にはベトナム南部のホーチミン市7区にあるタントアン輸出加工区への進出が決定し、TBIV社のベトナム進出が本格的にスタートすることとなった。

設立当初は、ヨーロッパ向けの輸出をメインに生産を行う予定であったが、2008年の夏ごろから円高が進み、またその後のリーマンショックの影響などもあり、ヨーロッパ向けの受注が減少した。しかし一方で日本側では、新規の顧客の開拓などが順調に進んだ為、現在では、製品の殆どが日本向けの輸出となっており、一部をヨーロッパに輸出している。今後は、東南アジアなど周辺諸国への販売も視野に事業展開を進める予定だ。

中根氏は2008年1月に現地工場の責任者としてベトナムに赴任してきた。それまでは、短期の出張で2回ほどベトナムを訪れていたものの、本格的なベトナム駐在はその時が初めてであった。

中根氏に最初にベトナムを訪れたときの印象を伺うと、大昔の日本に来たような感覚があったそうだ。また、バイクの多さにも驚いたとのことであった。

中根氏にとって、長期の海外赴任は初めての経験であり、工場の立上げも初めてであったため、生活面でも仕事面でも、当初は非常に不安が多かったそうだ。しかし、現地スタッフのサポートもあり、現在駐在3年目になるが生

ホイールに付けられている“バランスウェイト”
はとても重要な部品



4輪 スチールホイール 超薄板リム用
(クリップ タイプ)



2輪 キャストホイール センターリフ
クリップ タイプ





工場内の作業の様子

活面では、健康面も含めて特に大きな問題は無く、安定した生活環境で仕事に取り組めるようになっているとのことであった。

工場の立上げに関しては、まず設立当初に2名のスタッフを採用し、そのスタッフを中心に建設、事業準備を進め、1月下旬の工場完成後にワーカーを採用し、2月から約30名体制での事業がスタートし、3月には初出荷も無事に行われた。その後も順調に事業は拡大しており、現在では、事務所スタッフと工場従業員併せて80名体制で事業を行っている。

労務管理

中根氏によると、2008年のTBIV社立上げ当時は、人材の採用もそれ程困ることは無く、募集をかければ40~50人は直ぐに集まるといった状況であったようだ。しかし、最近ではやはりワーカーの募集が難しくなっているようで、現在は募集をかけても数十人規模で応募者が出るということは殆ど無く、数名程度の応募がパラパラと出るような状況とのことである。TBIV社では特に大規模な募集は予定も無い為、その程度の応募者数であっても人員補充には特に問題が無いとのことであるが、大規模な募集が必要になった場合には、懸念される問題でもある。

募集の方法は、今までは輸出加工区の管理局を通じての募集が多かったが、今後は、求人募集の垂れ幕などを作成して工場に設置し、随時人材の募集を続けることも考えているとのことであった。

ベトナム人スタッフの評価についてお聞きしたところ、真面目な人間が多く特に問題は無いとのことであった。実際、スタッフクラスは立上げ当初のメンバーが全員残っており、工場作業も立ち上げ時に採用した20名のうち6名が現在でも残っているようだ。それらのメンバーが、現在では、リーダー的な立場とし

て新入社員の指導にあたっており、会社の中心的な力になってくれているとのこと、離職率もそれ程高くないようだ。ただ、仕事量が減ってくると退職する作業が増える傾向にある為、継続的に仕事がある状態を維持することが今後の課題とのこと。

人件費については、2008年当時から毎年最低賃金が急激に上昇し、当初の想定よりは速いペースで人件費が上がってきており、今後の予測が難しくなっている。ただ、周辺国のタイなどと比べるとまだまだ、ワーカーの人件費に関しては割安感がある為、ワーカーの人件費に関してはメリットを感じているとのことである。

スタッフの定着率が高いことに関して、何か特別な対応がされているのかお聞きしたところ、年に1回は社員旅行を行い、社長の来越に合わせて2ヶ月に1回回はスタッフとの食事会、また年に2回は全社員共同の食事会を開くなどして、社員と積極的にコミュニケーションをとるように心がけているとのことであった。

業務の進め方

ベトナムで事業を進めるに当たり、戸惑ったことや文化の違いなどを感じたケースをお聞きすると、ベトナム人スタッフは、自分達の役割に拘り、それ以外の業務を拒否したり、ベトナム流のやり方を頑なに主張したり、お金についてハッキリと主張するといった点が日本との違いとして感じられたとのことである。それに対しては、ベトナムであっても日系企業であり日本のやり方も取り入れて業務をするようにと指導し、また誤解の無いようによくコミュニケーションをとる事を心がけているようだ。出来る限り、現地スタッフを信頼して仕事を任せ、信頼関係を構築することが大切なポイントとしているようだ。

同社では、材料以外の資材の仕入先として現地企業を大いに活用しているとのこと。

現地企業の情報をスタッフが調べ、金型、メッキ、印刷、包装資材などが現地企業からの調達で賄われているそうで、コストの削減に大いに役立っているとのことであった。

また、品質に関しても、それほど大きな問題は発生したことが無く、要求レベルによっては十分必要条件を満たす製品が納品され、非常に利用価値が高いと中根氏は判断しており、まずは現地企業から調達できないかを調査して、どうしても難しい場合は日本ないし日系企業から調達するという形をとっている。ただし、緻密な製品や材料に関しては、まだベトナムでの現地調達は難しいようである。

今後の計画

現段階では、日本市場向けの生産がメインであり、短期的にはこの日本側の販売拡大に沿ってベトナム側の人員増強、機械設備の増設などを行っていく予定とのことである。

ベトナムの内需に関しては、現状では殆ど考えていないようであるが、2015年のASEANの貿易自由化により、ASEAN諸国の住み分けがどの様に進むのかを見極めながら、発展戦略を構築したいとのことであった。



正確さを重視した検品管理